

ロシアのウクライナ侵攻の 影響

今月の海外レポートは、新型コロナウイルス出現時のように、ウクライナ侵攻を抜きには書けないほど、中立国スイスも描きこまれた。

チューリヒ歌劇場で《モンテヴェルディ》の千秋楽を所見したのは侵攻開始2日後の2月26日だった。この作品は、モンテヴェルディの音楽とカンツォーネを交差させた古今のイタリアをバレエ付きで表現したのだが、リッカルド・ミナージが弾き振りするバロック音楽が開戦直後の緊張した心を癒してくれた。ダンサーでは、前田明里がますます目を引く踊りを見せた。

同じころ当歌劇場経営陣は、3月末に2回マクベス夫人を歌うはずだったアンナ・ネトレブコに、プーチン大統領と距離を置くかどうか、現状の立ち位置を確認していたという。その結果、双方合意で出演を見合わせた。当歌劇場は短期間でウクライナ・チャリティ・コンサートのプログラムを練り、3月4日に発表すると数日で完売となったため、オーケストラ・ピットを削って作った2列をオークション形式で売り出し、総額18万フランを赤十字に寄付した。

3月11日のチャリティ・コンサートではウクライナ国旗色の照明をバックに、ウクライナ国歌の弦楽版バラフラスとヨハン・アドルフ・ハッセ「歌劇《クレオフィード》序曲」をコンサートマスターのバルトウオミ・ニジヨウが弾き振りしたあと、ヴェルディ《マクベス》第4幕の合唱（虐げられた祖国）で、ウクライナの現状と同じ悲しみを歌った。ウクライナ人合唱団員を

中心にウクライナ民謡を合唱したあと、ウクライナ人専属歌手や、ロシアやウクライナなど4カ国の血を引く歌手もウクライナ人ピアノリストの伴奏でウクライナ民謡を披露した。ローレンス・ブラウンリーの歌う黒人霊歌も心にしみた。バレエも挟みながら、バンジヤマン・ベルネームとジヨルジ



チューリヒ歌劇場の《アルジェのイタリヤ女》から。バルトリ（左、イザベッラ役）とアブドラザコフ（右、ムスタファ役） ©Monika Rittershaus

ンデル《メサイア》から（なぜ国々は騒ぎ立つのか）、シヨスタコーヴィチ《アレクサンデル・ブロークの詩による7つの歌曲》から（予言の鳥ガムエーン）を熱唱するラウラ・アイキン、ピエトロ・スバニョーリが反ファシスト運動家のように歌う《ベツラ・チャオ》で反戦意識が頂点に達したところ、最後はジョン・レ

ユ・ペテアンが歌ったヴェルディ《ドン・カルロ》の二重唱（われらの胸に友情を）、トーマス・ハンフソンが選んだマーラーの歌曲《塔の中の囚人の歌》、サンドラ・アマウイが扮するマノンの《さようなら、私たちの小さなテンプルよ》（マスネ《マノン》）から、シエイン・ダヴィドソンの歌うへ

くにイルダール・アブドラザコフは当歌劇場初出演だが、観客をあせんとさせて笑わせた。歌唱力も粒ぞろいだが、ローレンス・ブラウンリーは特筆に値する。ヒロインのチェチーリア・バルトリも、すべてを忘れさせるオーラと清潔な色気、歌唱力で完璧なイザベッラを演じた。

音楽祭でも

ルツェルン音楽祭は2月28日、隣国に先駆けて、ロシアのヴァレデーミル・プーチン大統領と親しいヴァレリー・ゲルギエフが指揮するマリンスキー歌劇場管弦楽団2公演（8月21、22日）と、デニス・マツォーフの出演（8月13日）をキャンセルした（代役は藤田真央）。ゲルギエフと出演予定だったタニール・トリフォノフは残り、「ロシア人排斥ではなく、プーチン支持かどうかの問題」という態度を明らかにした。ゲルギエフはヴェルビエ音楽祭管弦楽団音楽監督の辞任も決まった。3月8日のルツェルン音楽祭記者会見を見てもヘフリガー総裁は「いままでも長年培ってきたゲルギエフらとの関係を断つのは喜ばしい決断だったが、このような蛮行を見て見ぬふりはできない」とウクライナ侵攻に対する立場を明言。4月のメンデルスゾーン・フェスト中、9日にウクライナ・チャリティ・コンサートが開催される。

当音楽祭今年の夏は「多様性」をテーマに、クラシック音楽界では居場所を与えられなかった黒人の音楽家をフォーカス、《ボーギーとベス》を全員黒人で上演するほか、2016年に続き女性指揮者にも焦点を当てる。現代音楽ではヴォルフガング・リームの70歳を祝う企画や、レジデンス作曲家のトーマス・アデスが、アンネ・ゾフィー・ムターのために書いたヴァイオリン協奏曲も初演される。

単独の演奏会ではロシア人全体を敬遠する傾向にあり、チェリストのアナスタシア・コペキナはプーチンのウクライナ侵攻に反対を表明したにもかかわらず、3月27日、スイス東部のイッティンゲンの演奏会をキャンセルされた。